中世ドイツ語における迂言表現

── 押韻技法の観点から ──　その3

武　市　　修

1．はじめに

言語を表現手段とする芸術である文学は，その表現形式から大きくLyrik, Epik, Dramatikの三つのジャンルに分類されるが，中世盛期のドイツにおいてはDramaはまだ文学形式として成熟しておらず，LyrikとEpikが中心であった．それらは一定の形式に則った押韻詩であり，リズムと脚韻が重視される．詩人たちは韻律上の制約の中でさまざまな文彩（rhetorische Figuren）を駆使し，表現に工夫を凝らした．筆者はこれまで押韻技法の観点から見た代替表現として動詞の迂言法について調べてきた[1]が，同じ視点からこれから名詞の迂言表現について詳しく見ていきたい．

2．dincによる迂言表現

dincはふつうnhd.のDingと同じく，物，事を意味する中性名詞であるが，これが2格でiht, niht, vilに添えられ，dinc自体に意味がなく，ただ行を満たしリズムを整えるためだけに用いられることがある．

(1) hœrt <u>iht dinges</u> mê dar zuo
daz ist guot, daz man daz tuo (Vrid. 95, 10f.)
このことについてもう少しお聞きください
そうしていただくのはよいことなのです

(2) daz ich in mînem sinne
<u>niht dinges</u> kan gemeinen
noch geminnen wan iuch einen (Trist. 13914-16)
それで私はあなたお一人以外には

どなたも心に思うことも
愛することもできません

(3) vil dinges ist von ir geschehen (Parz. 533, 15)
その［＝ミンネの］ために多くのことが起こった

これらの例では行の音節を満たすためにiht, niht, vilがdincの2格を伴っている．(2)の例では，事物ではなくniemanの代わりにniht dingesを用いている．それぞれ当該の行の韻律を示せば，次のようになる．

hœrt iht dinges mê dar zuo
| x́　x | x́　x |　x́　x | x́ ^ |
niht dinges kan gemeinen
x | x́　x | x́　x | ̀ | x̀ ^ |
vil dinges ist von ir geschehen
x| x́　x |x́　x |x́　x |　̀　̆　^ |

たしかに，iht, niht, vilなどは名詞的に用いられる場合，部分を表わす2格の名詞や代名詞を伴うことがひじょうに多い．しかしその場合には，具体的内容をもつ名詞や代名詞の2格であり，それ以外に次に示すように，主語や目的語など単独の文成分として用いられることもあり，上の例でも意味だけからすれば，それぞれiht, niht, vilだけで十分である．なお，例(1)の2行目tuoは動詞tuonの接続法現在で，前行のzuoと韻を合わせているが，この接続法はez ist besser, ez ist guot, mir ist lieberなどの上位文に対する実質的な主語文の機能をもつdaz文中で，可能性を表わすためのものであり[2]，押韻のために直説法を無理やり接続法にしたものではない．

(1′) diu sprach „sol mich iht gevröun,
daz tuot ein dinc, ob in sîn töun
læzet, den vil trûrgen man (Parz. 253, 19-21)
彼女は言った，「もし私を喜ばせるものが何かあるとしたら，
それは，あの痛ましいお方，あの方が
死を免れるというただひとつのことだけです

(2′) Gote ist niht verborgen vor,

er siht durch aller herzen tor (Vrid. 2, 6f.)
神の前には何事も隠されてはいない．
神はどんな人の心の扉もとおしてお見通しなのです

(3′) ir hât sô vil durch mich getân (Iw. 4341)
あなたは私のためにそれほど多くのことをして下さいました

例(1′)の2行目のdincは普通の意味の名詞である．3行目のvilは副詞的に用いられ，形容詞trûrgenを修飾している．中世盛期のドイツ語ではvilは名詞的用法と副詞的用法のみで，nhd.のように名詞を修飾する形容詞としては，まだ用いられない．

dincにはまた，上と同じ理由から形容詞が付加し，抽象名詞の書き替えや，さらに，前置詞を伴い副詞の代用に用いられることもある．

(4) er hæte manege tugende erkant,
als er dem wol ze lêre zam,
der ouch von sîner lêre nam
vil manegiu tugentlîchiu dinc (Trist. 2266-69)
彼［＝クルヴェナル］は数々の勝れた技能に通じていたので
彼の教えから多くの技能を
学びとろうとする者にとっては
実にふさわしい教師であった

(5) fünf hundert stabeslingen
mit listeclîchen dingen
zem swanke wârn bereite (Parz. 568, 21-23)
五百台もの投石機が
巧みに据え付けられて
発射準備が整えられていた

例(4)の4行目manegiu tugentlîchiu dincは1行目のmanege tugendeと同義であり，押韻のためにdincが使われている．例(5)のmit listeclîchen dingenは副詞listeclîche[n]と同じ意味であるが，それでは行が不完全で，しかも韻が踏めないためこの表現になっている．単数でもmit

höfschlîchem dinge (Parz. 762, 8)でhöfschlîche, mit werdeclîchem dinge (Parz. 777, 10)でwerdeclîcheの代わりに副詞的に用いる例も見られるが，前置詞を伴ったこのような書き替え表現では複数形が圧倒的に多い．他にもmit arbeitlîchen dingen (Barl. 373)でmit arbeite, mit herzelîchen dingen (Engelh. 1000)でherzelîche，さらには，in disen dingen (Trist. 15554)でwährend dessen, mit keinen dingen (Vrid. 43, 10)でauf keine Weiseの意など数多く見られる．

これらの例はほとんどが単数3格のdingeあるいは複数3格のdingenで押韻し，『イーヴァイン』では本来の意味のdingenも含めて8例すべてでdingenが行末にきて，その押韻相手はringen, volbringen, gelingen, twingenなど多様である．dingeは5例中2例のみ押韻に用いられている．また，『トリスタン』ではdingeが35例中15度，dingenが52例中27度文末にきているが，しかし『ニーベルンゲンの歌』にはdinge，dingenの使用例そのものがそれぞれ3度および6度と少なく，それらによる押韻も，このような書き替え用法も一例も見られない．『パルツィヴァール』ではdinge 5例（うち3度押韻），dingen 4例（うち3度押韻），『イタリアの客人』ではdinge 13度（うち1度押韻），dingen 65度（うち32度押韻）と作品によってその使用頻度，使用法にばらつきが見られる．dingeとdingenについての使用数と押韻数（かっこ内）を表にして示すと，

	dinge	dingen
NL	3 (0)	6 (0)
Iwein	5 (2)	8 (8)
Parz.	5 (3)	4 (3)
Trist.	35 (15)	52 (27)
W. gast	13 (1)	65 (32)

ところで，dincはまた，所有代名詞や人の2格を伴って，その人に関係することやその人の振る舞い，行為を表わす[3]．

(6) wie <u>Tristandes dinc</u> stê (Trist. 14971)
　トリスタンがどうしているのか

(7) Swerz ruocht vernemn, dem tuon ich kuont
wie im sîn dinc dâ nâch gestuont (Parz. 446, 1f.)
彼［＝パルツィヴァール］がその後どうしていたのか
聞きたいと思う人にお知らせしましょう

(8) biz s'aber von in vernæme,
wie in zwein ir dinc kæme (Trist. 16635f.)
彼らふたりがその後どうなったか
彼女［＝ブランゲーネ］が再びその消息を聞くまで

(9) sô sî die wârheit ersiht,
zehant enist ir dinges niht. (Trist. 13827f.)
それ［＝恋］が真実を目にすれば
たちまちそれは駄目になってしまう

これらは今日のドイツ語では非人称のesで表わされ，wie es Tristan gehtやwie es ihm danach erging，またwie es ihnen beiden erginge などとなるところである．(9)の例についてもガンツ(P. Ganz)はdann ist es sofort um sie geschehenと注釈を付している[4]．また，このようなdincが目的語にもなって，

(10) mîn sun mit vlîziclîcher maht
kêrte dar an sîn gerinc
wie er der hübschen liute dinc
alsô geschaffen möhte
daz ez nâch êren töhte (g. Gerh. 3540-44)
私の息子は一生懸命力を尽くし，
どうしたら雅びな人々のために
名誉にふさわしく場を
整えることができるかと
努力を傾けました

上の例は韻律上の制約を満たすための迂言表現であり，mhd.でも次のように，このようなezの非人称表現あるいは不定の目的語の用法がないわ

けではない．

(11) und sage mir ouch, wie stêt ez dir (Parz. 442, 4)
あなたがどんな様子なのか，私にも話しておくれ

(12) daz lâzet ir mich hœren, wie ez iu edelen recken stât (NL 349, 4)
あなた方尊い騎士のみな様，どうなさったのかお聞かせ下さい

(13) wir ergebenz dir in dîn gebot (g. Gerh. 2771)
わたしたちはあなたにお任せいたします

3．êreによる迂言表現

êreは「名声，名誉」，とりわけ騎士の戦いの勝利がもたらす「栄誉」，それから転じて「戦いの勝利」そのものを意味し，また，宮廷の騎士として当然もつべき徳操としての名誉感情をも表わし，擬人化して用いられることもある．さらに，相手に対して示す「敬意」をも表わし，nhd. とは異なり複数で用いられることも多い．このêreが本来の意味が薄れて，上で見たのと同様にリズムを整えたり，押韻したりするのに利用されることがある．先ず，人の3格と前置詞ze＋複数3格êrenで「～に敬意を表わして」から「～のために」という意味で用いられる．これはnhd. でもそのままjm. zu Ehrenで残っている．

(14) diz bôt si zêrn ir gaste (Parz. 34, 4)
それは彼女が客人に敬意を示すためにしたことであった

(15) er dâhte, „ich wil in zêren
mich an slâfen kêren.“ (Parz. 553, 19f.)
彼は考えた「彼女たちのために
ひと眠りしよう」と

(16) Got man dô zen êren eine messe sanc (NL 33, 1)
神さまのためにその時ミサが捧げられた

例(14)のzêrnは前置詞zeとêreの複数形êrenの融合形であり，リズム

を整えるために語尾が欠けているが，人の3格（ir gaste）を伴って，「客人の名誉のために」，「客人に敬意を表わして」の意味である．この行の韻律は次のとおりである．

diz bôt si zêrn ir gaste
x | x́ x| x́ x| ˊ| x́ ˆ|

(15)の例は『パルツィヴァール』第11巻のはじめのところで，魔法の城シャステル・マルヴェイレを前にして，渡し守の館に泊めてもらったガーヴァーンが早朝目を醒まし，向かいの城の中に朝早くから立ち働く多くの婦人たちの姿を目にして考えたことを，滑稽に表現したところである．バールチュ（K. Bartsch）はこの個所にihnen zu Ehren, um ihretwillen; damit sie meinem Beispiel folgenと注を付している[5]のに対し，マルティン（E. Martin）はum ihretwillen, um sie nicht durch Neugierde zu belästigenとして[6]ガーヴァインの意図を違って解釈しているが，in z'êrenについては両者とも「彼女たちのために」としている．

例(16)でもデ・ボーアが脚注で言及しているように[7]，gotの3格はふつう例(2′)のように語尾-eが付けられるところを，リズムを整えるためにこの語尾を省き，さらに，nhd.では決して定冠詞が付かずzu Ehrenのみであるが，同じ理由からêrenに定冠詞を付して前置詞との融合形zenとなっている．つまり，定冠詞なしのze êrenとした場合，zeの弱音-eは次のêと同じ母音が重なるため，韻律上この弱音-eは無いものとされ，そうなると，ここは強音が三つ続くことになり，それを避けるためにzenとしたのである．なお，zen êrenの形は『ニーベルンゲンの歌』にのみ用いられ，この個所以外に4度[8]現われるが，他の作品には見られない．この行の韻律は次のようになる．

Got man dô zen êren eine messe sanc
| x́ x | x́ x |ˊ| x̀ ˆ| |x́ x| x́ x| x́ ˆ| ˆ ˆ |

人の3格＋ze[n] êrenは『ニーベルンゲンの歌』では9例（うち押韻は0），『パルツィヴァール』では7例（うち押韻は2）見られるが，『イーヴァイン』には1例もない[9]．この表現ではふつうêreは複数形になるが，押韻のために単数形になっている例を含めて『イタリアの客人』に現われるただ二つの用例を次に示してみよう．

(17) ich tet ez einer vrowen ze êre,
diu bat mich der selben lêre (W. gast 1555f.)
私はその教訓を教えてほしいと私に頼んだ
ある婦人のためにそうしたのです

(18) und lebt hiut Aristôteles,
im entæt dehein ander
künic daz im Alexander
ze êren tet di wîl er lebt (W. gast 6414-17)
もし今日アリストテレスが生きていたとしても
アレキサンダーが生きているあいだに
彼のためにしたことを
他のどんな王も彼にしないであろう

『イタリアの客人』は，当時の乱れた世相を批判し，領主，騎士，僧侶，婦人たちにキリスト教徒としてのあるべき正しい態度を教え示す教訓詩である．そこではêreはほとんどが本来の「名誉」，「栄誉」の意味で用いられるが，例(17)は語り手が以前にプロバンス語[10]で正しいミンネのあり方，不実な求愛者の見分け方について述べたことがあり，そのきっかけが，ある婦人に頼まれたことにあると明かしているところである．(18)の例は，騎士が徳操をないがしろにし，僧侶は学問を顧みなくなった状況を前に，アリストテレス，ゼノン，パルメニデース，プラトン，ピタゴラス，アナクサゴラスのような人に敬意を示さない領主たちを戒めるくだりである．

êreはまた，前置詞durchの目的語となりその前に所有代名詞や名詞の2格，時には形容詞を伴って，上と同じように「～の(名誉)ために」の意味で用いられる．

(19) deiswâr geriet ich irz ie,
daz tet ich durch ir êre (Iw. 4060f.)
誠に私は奥方さまにかつてそうお薦めいたしましたが，
それはあの方の(名誉の)ためにしたことです

(20) si bat mit klagenden worten

den künec durch alle wîpheit,
daz er im lieze ir laster leit,
unt durch magetuomlîch êre (Parz. 526, 26-29)
彼女は王に言葉で訴えて頼みました，
すべての女性のために
また，乙女の名誉のために
王が彼女の恥辱を遺憾に思ってくれるように

(21) vür wâr ich iu daz sagen wil,
daz sî tuont durch ruom mêre
danne durch der tugende êre (W. gast 3726-28)
誠に私はあなた方に申し上げたい，
彼らは徳操のためというよりも
より多く名誉欲のために行動するのです

例(20)では，「～のために」を意味する前置詞durchの句がふたつ，どちらも内容的には3行目のdaz文に入るべきものであるが，押韻とリズムの関係で，このようにnhd.なら統語的に無理な語順となっている．また，2行目のdurch alle wîpheitも，K. バールチュ，E. マルティンとも注釈しているように，ふつうはdurch alliu wîpであるが，これも押韻のための迂言表現である[11]．(21)の例では2行目のdurch ruomと同じく3行目もdurch tugentでよいところが，mêreと押韻するためにdurch der tugende êreとし，êreには実質的な意味はない．

durch ～ êreはeinem ze êrenと違って，『パルツィヴァール』の6例すべて，ハルトマンでも『イーヴァイン』1例以外に，肉体と心の対話編『小簡』(Büchlein) の7例すべてでêreが行末にきて押韻に用いられている．『トリスタン』でも15例中11例がêreで押韻している．ただし『ニーベルンゲンの歌』ではこれはわずか1例しかなく，それも行中である．

4．liebeによる迂言表現

mhd.のliebeは第一義的には「喜び」を意味し，次第にminneと並ん

で「愛」,「恋」の意味でも用いられるようになる．この liebe が êre と同じように前置詞 ze とともに 3 格を伴って，また，所有代名詞や名詞の 2 格が付加して前置詞 durch とともに「～のために」を表わすことがある．そしてそれらの中で前者が nhd.では一語となり，jm. zuliebe として残っている．

(22) si tete ez, als uns diz mære seit,
ze niuwenne ir senede leit
und ze liebe Tristande,
der'z ir durch liebe sande (Trist. 16353-56)
彼女がそうしたのは，この物語が伝えるところによれば，
彼女の恋いこがれる苦しみを新たにするためであり
彼女に愛ゆえにそれを送ってくれた
トリスタンへの愛のためであった

(23) sî wurden vil vaste
ze liebe dem gaste
alle wider ir willen vrô (Iw. 4403-5)
彼らはみんな客人のために
自分たちの（本当の）気持ちに反して
たいそう楽しげな振りをした

(24) die durch mîne liebe　wellent ellende sîn (NL 1282, 2)
私のために異国に行ってくれる（友などどこにいるでしょう）

(25) geselle, nû bite ich dich
durch sîne liebe und durch mich
daz du dîns rehtes niht ennemest (Er. 1142-44)
いとしい方，彼のためそして私のため
どうかお願いします，（彼の消息が分かるまで）
あなたの権利を行使しないように

(26) Jane lob' ichz niht sô verre　durch die liebe dîn
sô durch dîne swester,　daz scœne magedîn (NL 388, 1f.)
誠に私がこんな約束をするのもあなたのためというよりも

あなたのお妹君，あの美しい姫君のためなのです

(27) Siglint diu rîche　nâch alten siten pflac
durch ir sunes liebe　teilen rôtez golt (NL 40, 2-3)
富貴なジグリントは昔からのしきたりに従って
彼女の息子のために輝く黄金を人々に分かち与えた

例(22)のふたつのliebeは「愛」の意味が強く残り，それぞれ「トリスタンへの愛のために」，「愛のために」であろう．例(23)では(22)の3行目と同じくze liebeが3格を伴っているが，ここは「愛」の意味はなく，(15)のz' êrenと同じく「客人のために」である．(24)の例でも意味上はdurch michで十分であるが，韻律を整えるためにdurch mîne liebeとなっているのである．そのことは(25)の2行目からはっきりと分かる．このdurch sîne liebeについてベヒ（Fedor Bech）はaus Liebe zu ihmすなわちum seinetwillenであると注釈を付けている[12].

例(26)の1行目は意味の上だけからすれば，例(25)2行目のdurch michと同じようにdurch dichでいいことは，次行のdurch dîne swesterからも分かるが，行を満たすためこの表現になり，しかも押韻のため所有代名詞が無変化で後置されている．例(27)でも下線部はdurch ir sunと同じ意味だが，行を満たすために(21)のdurch der tugende êreと同じく2格の名詞(ir sunes)を間に挟み込んでいるのである．ちなみにこの行の韻律は次のようになる．

durch ir sunes liebe　　teilen rôtez golt
| x́　x | x́ x | ̀ | x́ ^ | | x́ x | x́ x | x́ ^ | ^ ^ |

liebeによるこのような表現も，作品によって使用頻度に大きな違いがある．einem ze liebeは『ニーベルンゲンの歌』ではわずか1例のみ，『イーヴァイン』，『トリスタン』でも3例と2例，durch ～ liebeは『イーヴァイン』，『トリスタン』とも1例[13]しかないのに対し，『ニーベルンゲンの歌』では26例ある．しかし，不思議なことに『パルツィヴァール』にはこのどちらの用例も皆無である[14].

ところで「～のために」といえば，durch ～ willenがある．このwillenは意志，願望を表わす男性弱変化名詞willeの4格で，本来は前置詞

durchの目的語である．それが所有代名詞や2格の名詞を伴い，この言い回しでdurch ～ liebeのように適合だけでなく，目的，原因，理由をも表わす．またgotの2格を伴い，nhd.のum Gottes willenと同じように，強い要望や疑問をも表現する．この用例も作品によって頻度にばらつきがある．すなわち『ニーベルンゲンの歌』の15度（うち7度次の例のようにmînで押韻），『トリスタン』の17度（うちmînで4度，dînで1度押韻）に対し，『イーヴァイン』では3（0）度，『パルツィヴァール』では2（1）度『イタリアの客人』では3（0）度に過ぎない．以下に『ニーベルンゲンの歌』からの3例と『トリスタン』からの1例を示してみよう．

(28) er sprach: „ir sult niht weinen　durch den willen mîn;
immer âne sorge　sult ir mînes lîbes sîn.“ (NL 69, 3f.)
彼は言った「私のために涙を流してはいけません．
私のことならご心配にはおよびません．」

(29) Dô riten si von dannen　in einen tiefen walt
durch kurzewîle willen (NL 926, 1-2a.)
そこで彼らは気晴らしのために，深い森へと
馬を進めて行った

(30) durch willen sîner sêle　waz opfers man dô truoc!
(NL 1052, 3)
彼の魂の（供養）のためにどれほどの供物が捧げられたことか

(31) heizet mich vüeren oder tragen
durch gotes willen eteswar (Trist. 9486f.)
後生ですからどうか私をどこか（せめて今日一日看病
してもらえるところへ）運ばせて下さい

例(28)は美しいクリエムヒルトの噂を聞いた若きジーフリトが，わずかの手勢のみで，ブルゴントへ求婚の旅に出ることになり，心配する両親に向かって暇乞いのときに言った言葉である．durch den willen mînは例(26)のdurch die liebe dînの用法とほとんど同じである．『ニーベルンゲンの歌』ではこの例を含めてdurch den willen mînで7度押韻し，そ

のうち5度は押韻相手が動詞の不定詞sînである．なお，次行のmînes lîbesはâne sorgeにかかる2格であり，ohne Sorge um mein Leben, um michの意味であると，デ・ボーアが脚注で述べているとおり，mînes lîbesは人称代名詞2格のmînの代わりであり，これも次稿で詳しく見るように，押韻とリズムのための代用表現である．

例(29)はリズムを整えるために2格名詞を間に挟み込み，目的を表わす．例(30)は同じ理由から2格名詞がうしろに続いているだけでなく，本来は感嘆文に入るべき文成分が前に飛び出した特別の語順になっている[15]．グリムの『ドイツ語辞典』によれば，durch ～ willenはもっぱら上部ドイツ語地域で用いられていたが，16世紀以降にすたれ，um ～ willenにとって代わられるようになったということである[16]．

「～のために」というこれらの表現は押韻手段としてよりは，むしろリズムを整え韻律上の制約を満たすために用いられているようである．これらの使用頻度を五作品について一覧表にして示してみよう（かっこ内の数字は押韻数で内数）．

	einem ze êren	durch ～ êre	einem ze liebe	durch ～ liebe	durch ～ willen
NL	9 (0)	1 (0)	1 (0)	26 (1)	15 (7)
Iwein	0	1 (1)	3 (0)	1 (0)	3 (0)
Parz.	7 (2)	6 (6)	0	0	2 (1)
W. gast	2 (1)	1 (1)	0	1 (0)	3 (0)
Trist.	0	15 (11)	2 (0)	1 (0)	17 (5)

5．geschihtによる迂言表現

動詞geschehenから派生した強変化の女性名詞geschiht[17]はBegebenheit, Ereignis, Zufallなどを意味するが，これもそれ自体にほとんど意味がなく，形容詞や2格の名詞を伴って押韻手段として用いられることがある[18]．

(32) daz envuocte ouch anders niht
niuwan <u>ein wunderlich geschiht</u> (Iw. 8019-20)

それ［＝彼らが部屋に入るまで誰にも見られなかったこと］は
まことに，奇跡以外の何ものでもなかった

(33) ichn kan iu des gesagen niht
welch wunders geschiht
mich dâ her hât getragen (Iw. 3629-31)
私はあなたにお話しすることができません，
どんな不思議なことがあって
私がここに来たのかを

(34) nâch der toufe geschihte
ame grâle man geschriben vant (Parz. 818, 24f.)
洗礼が行われたあと（次のようなことが）
聖杯に書かれているのが見いだされた

(35) sine wirt aber gewunnen niht
mit alsô cleiner geschiht (Trist. 9851f.)
あの子［＝イソルデ］はしかし，そのような
つまらないもので得られはしません

(36) Swaz uns tuot schaden ode schant,
daz ist untugende genant.
dâ von mac dehein geschiht
dem guoten man geschaden niht (W. gast 5279-82)
我々に害や恥辱をもたらすものが何であれ
それは不徳と呼ばれる．
不徳のためにどんなことも
立派な人を害することはできない

(32) の例では wunderlich geschiht が，(33) の例では wunders geschiht が wunder の代わりに用いられ，どちらも niht と押韻している．(34) では前置詞 nâch の目的語となり，3 格の語尾を付けて前行の gesihte と，(35) でも 3 格であるが，語尾なしで niht と韻を踏んでいる．(36) では dehein geschiht で nhd.の nichts を意味し，niht と押韻している．geschiht は本来の意味も含めて『イーヴァイン』では 5 例，『トリスタン』でも 18 例

すべてが行末で，そのうち17例でnihtが押韻相手であり，geschihte 1例もslihteと韻を合わせている．

このようにgeschihtそのものに具体的な意味がない言い回しとしては，nhd.では押韻とは無関係にEr hat eine unangenehme Geschichte mit dem Magen「彼は胃の病気である」や，反語的にDas sind ja schöne Geschichten「結構なことですね＝ざまをみろ」などに名残が残っている．

本稿では名詞の迂言表現という観点からgeschihtについて検討しているが，このgeschihtという語形に関しては動詞geschehenの直説法3人称単数現在形が名詞よりもはるかに多く，しかも押韻に用いられている．その数を挙げると，『イーヴァイン』では25度現われ，その内18度がnihtで，5度が何らかのsihtで押韻している．『ニーベルンゲンの歌』では14度中13度，その内11度はnihtを，2度がsihtとversihtを相手に押韻しており，名詞geschihtは1例もない．『パルツィヴァール』では36例のgeschihtすべてが押韻しており，その内35例は動詞で押韻相手はgihtが1例，sihtが4例，残りの30個所はnihtである．ただ一ヶ所(155，22)の名詞もnihtと韻を合わせている．『トリスタン』でも28例の動詞geschihtのうち21個所でnichtと，何らかのsihtと4個所，gihtと1個所，合計26度押韻に用いられている．

『イタリアの客人』ではこの語は桁外れに多く利用され，301個所現われ，そのほとんどが動詞でnihtを相手に押韻している．具体的にその数を示すと，名詞geschihtは10例ありすべて行末にきて，その押韻相手はensiht 1例(9407f.)以外はすべてnihtである．動詞geschihtは実に291例見られ，そのうち241個所で押韻している．そしてその相手の語はihtが8度，gerihtが4度，何らかのsihtが4度，beriht, enwiht, schriftがそれぞれ1度ずつで，これらの小計19例以外の222個所がnihtである．このようにこの作品ではとくにgeschihtとnihtはまるで押韻用の対語とでも言えるほど多用されている．動詞geschehenのnhd.には見られない特別な用法を1例示しておこう．それは次のように，人の3格とze＋不定詞を伴い，「人が～することになる」「人が～しなければならない」という意味になるものであり，とりわけ『イタリアの客人』にこの用例が

多数見られる．

(37) swaz im durch in ze tuon geschiht,
daz sol er im verwîzen niht (W. gast 371f.)
彼［＝仲間］のためにどんなことをするはめになっても
それをその人のせいにしてはならない

6．gewinによる迂言表現

gewinはある物を手に入れること，とくに勝利の獲得，また，手に入れた物を意味し，形容詞や2格名詞によって詳しい内容を規定されることがあるが，2格名詞を伴ってgewinそのものにはほとんど意味がなく，押韻のための手段として用いられる場合がある．例えば，

(38) der was ergetzens gewin
komen nâch Cidegaste,
den si ê klaget sô vaste (Parz. 723, 4-6)
以前はチデガストを失いあれほど
悲嘆に暮れていた彼女［＝公妃］に
その間に十分な償いがなされていた

ここは直訳すると，「彼女にチデガスト（の死）のあと償いの獲得がきた」ということである．マルティンはこのergetzens gewinをErlangung des Schadenersatzesとしてgewinの原意を残した解釈をしている[19]が，バールチュはreichliche Entschädigungと注釈している[20]．次の例は両者の解釈が逆の場合である．

(39) hêrre, als i'u nôt gesage,
waz ich der im herzen trage,
sô gebt ir jâmers mir gewin (Parz. 612, 23-25)
殿，私が心にどれほどの悲しみを抱いているか，
苦しみのほどをあなたにお話をすれば，

私の悲しみをお分りいただけるでしょう

マルティンは3行目をso erhöht ihr meinen Seelenschmerz(, indem ihr mich veranlasst davon zu reden)「そうすれば，(あなたが私にそのことを話させることによって)あなたは私の心痛をますます大きくする」と解している[21]．一方，バールチュはso räumt ihr mir ein, daß ich Jammer gewonnen habe, daß ich tief unglücklich binとしてgewinの原意から転義していることを示唆している[22]．なお，この例でjâmersとgewinの間にmirが挿入されているのは韻律の関係であり，この行のリズムは次のようになる．

sô gebt ir jâmers mir gewin
x| x́ x | x́ x | x́ x|x́ ^ |

gewinはまた，daz文に規定されて，上と同様に用いられ，それがさらに，押韻のため複数形で現われることもある．それらを一例ずつ示すと，

(40) Dem einen gît er schœnen sin,
dem andern guot unt den gewin,
daz er sich mit sîn selbes muote swachet (Walth. 20, 19-21)
彼[=神]はある者にはすばらしい分別をお与えになり，
また，ある者には財物を，そして自分自身の心のもち方で
自分の身をおとしめるような結果をお与えになる

(41) swer in vürhtet hât die gewinne
daz in vürhtet aller slaht (W. gast 12900f.)
彼[=神]を恐れる者は結果的に
すべての物に恐れられることになる

このようなgewinをnhd.にどう移し代えるか，今日の訳者もさまざまな工夫を凝らしている．例えば，(39)の例の3行目をW. Spiewokはwerdet Ihr erkennen, wie groß mein Leid ist[23]と，P. Knechtはso werdet Ihr zugeben, daß der Preis des Jammers mir gehört[24]と訳し，(40)の例ではH. Böhmは2行目以下をdem andern Reichtum – aber mit dem Gewinn, daß er durch seine eigene Gesinnung sich entehrtとgewinの意味を残

している[25]のに対し，J. Schaeferはdem andern Güter und Erfolg, so viel, daß ihn sein Herz entehrtとしている[26].

本来の意味であれ，押韻手段であれ，名詞gewinも詩人によって用いられる頻度に大きな違いがある．例えば，単数形gewinは『パルツィヴァール』では28度（その内26度押韻），『イーヴァイン』，『ニーベルンゲンの歌』，『トリスタン』では，それぞれわずか2（2）度，1（1）度，2（1）度のみであるのに対し，『イタリアの客人』では37(34)度現われる．ここでgeschihtとgewinについても用例数と押韻数を五作品について一覧表にして示してみよう．

	geschiht（名詞）	geschiht（動詞）	gewin
NL	0	14 (13)	1 (1)
Iwein	5 (5)	25 (23)	2 (2)
Parz.	1 (1)	35 (35)	28 (26)
Trist.	18 (18)	28 (26)	2 (1)
W. gast	10 (10)	291 (241)	37 (34)

（次稿に続く）

引用原典および主要参考文献

Das Klagebüchlein Hartmanns von Aue und das zweite Büchlein. Herausgegeben von Ludwig Wolff, München 1972.

Hartmann von Aue: *Erec*. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung von Thomas Cramer, Frankfurt am Main 1980 [=Er.].

Derselbe: *Gregorius*. Herausgegeben und erläutert von Friedrich Neumann; 4. Auflage, Wiesbaden 1972 (Deutsche Klassiker des Mittelalters Neue Folge Bd.2).

Derselbe: *Iwein*. Herausgegeben von G. F. Benecke und Karl Lachmann, neubearbeitet von Ludwig Wolff; 7. Ausgabe, Bd. 1: Text, Berlin 1965 [=Iw.].

Das Nibelungenlied. Nach dem Text von K. Bartsch und H. de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse, Stuttgart 1997 [=NL].

Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von K. Bartsch, herausgegeben von H. de

Boor; 19. Auflage, Wiesbaden 1967 (Deutsche Klassiker des Mittelalters Bd. 3).

Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von K. Lachmann, Übersetzung von Peter Knecht, Einführung zum Text von Bernd Schirok, Berlin-New York 1998 [=Parz.].

Wolfram's von Eschenbach Parzival und Titurel. 3 Theile. Herausgegeben von Karl Bartsch; Zweite Auflage, Leipzig 1875-77.

Wolfram's von Eschenbach Parzival und Titurel. Herausgegeben und erklärt von Ernst Martin, Zweiter Teil: Kommentar, Halle 1903.

Gottfried von Strassburg: *Tristan*. Nach dem Text von Friedrich Ranke, neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn; 2. durchgesehene Auflage, Stuttgart 1981 [=Trist.].

Die Gedichte Walthers von der Vogelweide. Herausgegeben von Karl Lachmann; 13., aufgrund der zehnten, von Carl von Kraus bearbeiteten Ausgabe, neu herausgegeben von Hugo Kuhn, Berlin 1965.

Fridankes Bescheidehheit. Herausgegeben von H. E. Bezzenberger; Nachdruck der Ausgabe 1872, Aalen 1962 [=Vrid.].

Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria. Herausgegeben von H. Rückert, mit einer Einleitung und Register von F. Neumann, Berlin 1965 [=W. gast].

Der guote Gêrhart von Rudolf von Ems. Herausgegeben von John A. Asher; 2. revidierte Auflage, Tübingen 1971 [=g. Gerh.].

Rudolf von Ems: *Barlaam und Josaphat*. Herausgegeben von Franz Pfeiffer; Nachdruck der Ausgabe 1843, Berlin 1965 (Deutsche Neudrucke Reihe: Texte des Mittelalters) [=Barl.].

Engelhard. Eine Erzählung von Konrad von Würzburg. Mit Anmerkungen von Moritz Haupt; 2. Auflage, besorgt von E. Joseph, Leipzig 1890.

G. F. Benecke, W. Müller, F. Zarncke: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch* I-III; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-66, Hildesheim 1963 [=BMZ].

R. A. Boggs: *Hartmann von Aue Lemmatisierte Konkordanz zum Gesamtwerk*. Nendeln 1979 (Indices zur deutschen Literatur 12/13).

F. M. Bäuml/E.-M. Fallone: *A Concordance to the NIBELUNGENLIED (Bartsch-De Boor Text)*, Leeds 1976.

C. D. Hall: *A complete Concordance to Wolfram von Eschenbach's Parzival*. New York & London 1990.

C. D. Hall: *A complete Concordance to Gottfried von Strassburg's Tristan*. Lewiston/Queenston/Lampeter 1993.

Otto Paul/Ingeborg Glier: *Deutsche Metrik*. 7. Auflage, München 1968.

注

1）拙稿「中世ドイツ語における迂言表現 ── 押韻技法の観点から ── その1」関西大学『ドイツ文学』第42号（平成10年）150−172ページ.「中世ドイツ語における迂言表現 ── 押韻技法の観点から ── その2」関西大学『ドイツ文学』第44号（平成12年）251−289ページ.「中高ドイツ語に見られる語形の多様性 ── 押韻技法の観点から縮約形を中心に ──」阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』第42号（2000）81−102ページ.

2）Vgl. Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 20. Auflage von Hugo Moser und Ingeborg Schröbler, Tübingen 1969, § 376.

3）Vgl. BMZ I, 333[a], 20ff.

4）Vgl. P. Ganz: *Tristan* 2. Theil, S. 126, Anm. zu V. 13832.

5）Vgl. Bartsch: *Parzival* 2. Theil, S. 238, Anm. zu V. 19.

6）Vgl. Martin: *Parzival*, S. 406, Anm. zu 553, 19.

7）Vgl. de Boor: *Nibelungenlied*, S. 10, Anm. zu 33, 1.

8）他に290, 4; 1211, 4; 1417, 4; 1811, 3.

9）ハルトマンがこの表現を避けていたというわけではなく，例えば『エーレク』に3例,『グレゴーリウス』に2例あり，そのうち3度は押韻に用いられている.

10）原文にはin welhscher zungeとあるが，F. Neumannによれば，これはプロバンス語のことである．Vgl. *Der Wälsche Gast* XI.

11）Vgl. Bartsch: *Parzival* 2. Theil, S. 208, Anm. zu V. 717; Martin: *Parzival*, S. 391, Anm. zu 526, 27.

12）Vgl. Hartmann von Aue.: *Êrec der wunderære*. Herausgegeben von Fedor Bech (Deutsche Classiker des Mittelalters Bd. 4 Erster Theil), Leipzig 1867, S. 42, Anm. zu V. 1142.

13）この表現もハルトマンが避けていたわけではなく，例えば『エーレク』には7度現われ，durch die liebe mînで4度押韻している.

14）ze liebeが2度，durch liebeが10度見られるが，それらはいずれも「喜び」

や「愛」の原意を残したものであり，ここで言う迂言表現には当たらない．

15) waz や wie で導かれる従属の疑問文が驚嘆や感嘆を表わす感嘆文として用いられることが多く，直接疑問文からの転用はより稀である．この文もそのような感嘆文である．Vgl. Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 19. Auflage, bearbeitet von W. Mitzka; 2. Druck, Tübingen 1966, § 379.

16) Vgl. Jacob und Wilhelm Grimm: *Deutsches Wörterbuch* Bd. 30, Sp. 166.

17) nhd.では同じ女性名詞でも Geschichte と-e が付くが，mhd.では-e なしである．-e の付く形もあるが，それは強変化中性名詞であり，中高ドイツ語時代の主要作品ではもっぱら-e のない女性名詞として使われる．例(34)の-e の付いた形（Parz. 818, 24）も，強変化女性名詞 geschiht に 3 格の語尾が付いたものであることは，BMZ II^{2}, 117^{a}, 9f.に geschiht の項の例としてこの個所が挙げられていることから明らかである．中高ドイツ語ではこのように，強変化女性名詞では単数 2 格と 3 格で語尾の付くこともあった．他に 3 格の語尾の付いた形は，もっぱら durch Zufall を意味する von geschihte で現われ，『エーレク』に 5 度，『トリスタン』に 1 度見られる．

18) Vgl. BMZ II^{2}, 116^{b}, 26ff.

19) Vgl. Martin: *Parzival*, S. 481, Anm. zu 723, 4.

20) Vgl. Bartsch: *Parzival* 3. Theil, S. 101, Anm. zu V. 1324.

21) Vgl. Martin: *Parzival*, S. 432, Anm. zu 612, 25.

22) Vgl. Bartsch: *Parzival* 2. Theil, S. 300, Anm. zu V. 895.

23) Vgl. Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Mit Illustrationen aus der Berner Handschrift von 1467, übersetzt von W. Spiewok, Ottobrunn 1984, S. 318.

24) Vgl. Wolfram von Eschenbach: *Parzival* (P. Knecht), S. 616.

25) Vgl. *Die Gedichte Walthers von der Vogelweide*. Urtext mit Prosaübersetzung von Hans Böhm. Berlin 1964, S. 44.

26) Joerg Schaefer: *Walther von der Vogelweide Werke*. Darmstadt 1972, S. 241.

<付記>本稿は，関西大学より 1999 年度後期研修員として 6 ヵ月の研究期間を与えられた，その成果の一部である．ここに記して感謝したい．

武 市　　修

Umschreibungsausdrücke im mittelalterlichen Deutsch

— unter besonderer Berücksichtigung des Endreims — (3)

Osamu TAKEICHI

In der mittelalterlichen gebundenen Literatur benutzen die Dichter oft umschreibende Ausdrücke, um das Versmaß zu ordnen. Hier werden die nominalen Umschreibungsausdrücke behandelt, die den Rhythmus fließend machen und Reime bilden sollen.

1. Umschreibung mit *dinc*

mhd. *dinc* ist gewöhnlich ein Appellativum, das ein Ding oder eine Sache bedeutet. Dieses Substantiv dient im oben genannten Sinn zur Umschreibung, indem es im Genitiv *iht*, *niht* und *vil* begleitet, ohne an sich irgendetwas zu bedeuten, wo bloßes *iht*, *niht* oder *vil* bedeutungsmäßig genügt. Hier wird nur ein Beispiel von *vil* mit seinem Metrum angegeben, im Vergleich mit einem anderen, wo bloßes *vil* genug ist:

(1) *vil dinges ist von ir geschehen* (Parz. 533, 15)

x | x́ x | x́ x | x́ x | ⌣ ⌣ ^|

(1′) *ir hât sô vil durch mich getân* (Iw. 4341)

Zum gleichen Zweck vertritt *dinc* mit einem Possessivpronomen oder einem Genitiv der Person ein impersonales *ez* und auch in der präpositionalen Phrase mit einem Adjektiv das Adjektiv in seiner adverbialen Funktion, wie zum Beispiel:

(2) *wie im sîn dinc dâ nâch gestuont* (Parz. 446, 2)

(2′) *und sage mir ouch, wie stêt ez dir* (Parz. 442, 4)

(3) *fünf hundert stabeslingen*
mit listeclîchen dingen
zem swanke wârn bereite (Parz. 568, 21-23)

2. Umschreibung mit *êre*, *liebe* und *wille*

Neuhochdeutches „um ~ willen“ wird im Mittelhochdeutschen außer der Präposition *durch* mit der präpositionalen Phrase von *êre*, *liebe* und *wille* ausgedrückt, wovon „jm. zu Ehren“ und „jm. zuliebe“ in der deutschen Gegenwartssprache erhalten sind.

(4) *ich tet ez einer vrowen ze êre* (W. gast 1554)

(5) *daz sî tuont durch ruom mêre*
danne durch der tugende êre (W. gast 3727f.)

(6) *sî wurden vil vaste*
ze liebe dem gaste (Iw. 4403f.)

(7) *geselle, nû bite ich dich*
durch sîne liebe und durch mich (Er. 1142f.)

(8) *er sprach: „ir sult niht weinen durch den willen mîn* (NL 69, 3)

An den unterstrichenen Stellen genügt bedeutungsmäßig ein bloßes *durch* mit einem akkusativischen Substantiv oder Pronomen, wie z.B. *durch eine vrowe*, *durch tugent*, *durch den gast*, *durch in* und *durch mich*. Das bestätigt die Präpositionalphrase *durch ruom* im Wälschen Gast 3727 oder *durch mich* im Erec 1143. An den oben genannten Stellen gebraucht man wegen Reim und Metrum solche umschriebenen Ausdrücke. Hier wird an einer Tabelle gezeigt, wie oft solche Umschreibungen erscheinen. Je nach Werken ergeben sich Verschiedenheiten (die Zahlen in Klammern zeigen die zum Reimen benutzten Belege).

	einem ze êren	*durch ~ êre*	*einem ze liebe*	*durch ~ liebe*	*durch ~ willen*
NL	9 (0)	1 (0)	1 (0)	26 (1)	15 (7)
Iwein	0	1 (1)	3 (0)	1 (0)	3 (0)
Parz.	7 (2)	6 (6)	0	0	2 (1)
W. gast	2 (1)	1 (1)	0	1 (0)	3 (0)
Trist.	0	15 (11)	2 (0)	1 (0)	17 (5)

3. Umschreibung mit *geschiht*

Das Femininum *geschiht,* das „Begebenheit, Ereignis, Zufall" usw. bedeutet, wird von einem Adjektiv oder genitivischen Substantiv begleitet, wobei es ohne eigene Bedeutung aus Reimgründen benutzt wird.

(9) *daz envuocte ouch anders niht*
niuwan ein wunderlich geschiht (Iw. 8019f.)

(10) *ich kan iu des gesagen niht*
welch wunders geschiht
mich dâ her hât getragen (Iw. 3629-31)

wunderlich geschiht oder *wunders geschiht* vertritt ein bloßes *wunder* und reimt sich auf *niht.* Das Substantiv *geschiht* kommt überhaupt oft zum Reimen ans Versende, ob es zur Umschreibung dient oder nicht. So steht es alle 5mal im Iwein und alle 18mal im Tristan am Versende und hat nahezu jedesmal *niht* zum Reimpartner.

Die gleiche Form beim Verb *geschehen* tritt viel öfter auf als das nominale *geschiht.* Unter 25 Belegen im Iwein reimt es sich 18mal auf *niht* und 5mal auf irgendein *siht.* Im Nibelungenlied findet sich nur die verbale Form *geschiht,* und sie reimt sich von 14 Belegen 11mal auf *niht* und zweimal auf irgendein *siht.* Im Parzival finden wir 35mal verbales *geschiht* und nur einmal nominales *geschiht,* ohne Ausnahme im Reim, und zwar bei 31 von allen 36 Belegen mit *niht,* einmal mit *giht* und 4mal mit *siht.*

Im Wälschen Gast kommt *geschiht* weit häufiger vor. Bei 301 Belegen liegt fast stets eine verbale Form vor und sein Partnerwort im Reim ist fast immer *niht.* Hier wird ein für dieses Werk typischer Gebrauch von *geschehen* gezeigt.

(11) *swaz im durch in ze tuon geschiht,*
daz sol er im verwîzen niht (W. gast 371f.)

4. Umschreibung mit *gewin*

gewin bedeutet „das erlangen von etwas und das was man auf irgend eine weise erlangt; besonders erlangung des sieges“ (BMZ). Es wird auch von einem Substantiv im Genitiv oder einem *daz*-Satz bestimmt und dient fast ohne eigene Bedeutung zum Reimen. Hier sei ein Beispiel mit einem pluralischen *gewin* angegeben.

(12) *swer in vürhtet hât* *die gewinne*
daz in vürhtet aller slaht (W. gast 12900f.)

Bei *gewin* ist auch die Häufigkeit je nach den Werken sehr verschieden. Zum Beispiel erscheint ein singularisches *gewin* im Parzival 28mal (hiervon 26mal im Reim), im Nibelungenlied nur einmal im Reim, im Iwein und Tristan je zweimal (je zwei- und einmal im Reim), dagegen im Wälschen Gast 37(34) mal. Die folgende Tabelle bietet eine Übersicht dar, wie häufig *geschiht* und *gewin* in den fünf Werken gebraucht werden (die Zahlen in Klammern zeigen die zum Reimbezug benutzten Belege).

	geschiht (Nomen)	*geschiht* (Verb)	*gewin*
NL	0	14 (13)	1 (1)
Iwein	5 (5)	25 (23)	2 (2)
Parz.	1 (1)	35 (35)	28 (26)
Trist.	18 (18)	28 (26)	2 (1)
W. gast	10 (10)	291(241)	37 (34)

(Fortsetzung folgt)